

平成 27 年度 北海道ブロッククラブネットワークアクション 2015 開催報告

日時：[第1日目] 平成 27 年 10 月 31 日（土） 12:30～17:00

[第2日目] 平成 27 年 11 月 1 日（日） 9:00～12:00

会場：北海道立総合体育センター（北海きたえ〜る）

内容：

[1 日目]

①開会行事

②講演「地方創生と地域住民の主体性／スポーツは地方創生の一助になるか考える」

③日本体育協会からの情報提供

④パネルディスカッション

「地方創生と地域文化／スポーツを通じた地域の課題解決の方策を探る」

⑤グループディスカッション

「地域の課題を考える／地域課題に対する総合型クラブのアプローチを議論」

[2 日目]

①講演「自信を持とう！北海道！ヨーロッパクラブの視察を終えて」

②事例発表タイム「私のクラブ自慢」

③閉会行事



【概要】

人口減少社会の到来が近未来の課題として突きつけられ、地方創生が国の重要課題となる中、地域の課題解決に役立つ活動を標榜するクラブが、スポーツを切り口に、いかに地域に貢献できるかを探ろうと、メインテーマを「地方創生」としました。「地方創生」のアイデア抽出には多くの自治体が頭を抱えていますが、総合型クラブは「地域と共にある」ことが原点であり、今回は、地域活性化にスポーツ分野でどう関わることができるかを考える好機になりました。

1 日目は、講演やパネルディスカッションを通して、人口減少の現状や「まち・ひと・しごと創生法」の理念、国の政策・制度に理解を深め、全国各地の取り組み事例に興味を示しながら、わがまちで何ができるか、何をすべきかを模索しました。

2 日目は、ヨーロッパクラブの見聞事例が紹介され、北海道のクラブは「食と自然」という環境を活かした新たな成長戦略を描くことが重要との提言がなされました。また、事例発表タイム「私のクラブ自慢」は、クラブマネージャーら 10 人の奮戦ぶりが伝わり、紹介された事業内容からヒントを探ることもでき「良い企画だった」の声が聞かれました。



[1日目]

【講演について】

テーマ：「地方創生と地域住民の主体性／スポーツは地方創生の一助になるか考える」

講師：五十嵐智嘉子氏（一社）北海道総合研究調査会理事長

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官

我が国の人口減少の構造的要因について「地方から三大都市圏への若者の流出・流入と低出生率が人口減少に拍車をかけている」とし、北海道の人口動態を解説した後、「人口流入を増やし、未婚率の低下を防ぎ、有配偶出生率の向上を目指すため、地方に仕事を作り、安心して働ける環境の整備が重要」と説明されました。地方への人材還流にふれ、地方での受け皿づくりと人材育成の大切さを強調し、全国各地の事例に基づき、都市のコンパクト化、小さな拠点の形成、民間の創意工夫にヒントがあると説明されました。スポーツも地方創生の一つの切り口になるとし、キーワードとして①健康増進②スポーツ合宿誘致③アウトドアなどの観光体験などを挙げ、出席したクラブ関係者に対してスポーツを通した魅力あるまちづくりへの挑戦にエールを送りました。



【パネルディスカッションについて】

「地方創生と地域文化／スポーツを通した地域の課題解決の方策を探る」

パネリスト：三橋純子氏（北海道教育大学岩見沢校教授 美術文化専攻）

近江正隆氏（株式会社ノースプロダクション代表取締役）

伊端隆康氏（SC北海道ネット会長）

コーディネーター：山本理人氏（北海道教育大学岩見沢校教授）

三人のパネラーの提言に基づき、スポーツを通した地域の課題解決の方策を探りました。それぞれの立場でテーマに関わる活動内容を紹介し、フロアを含めたディスカッションを行いました。

- ・ 三橋さんは、別海町や三笠市における芸術分野での取り組み事例から「アートは人と関わり、地域と関わり、固有の資源となる」と述べられました。
- ・ 近江さんは、異業種の若者連携による新しいまちづくり事例として、農村ホームステイ、学校発のまちづくりなどの「浦幌スタイル」を挙げ、人づくりの大切さを訴えました。
- ・ 伊端さんは、社会教育施設の指定管理者としての取り組みを紹介した後、「住民目線」と「人材育成」の大切を強調した。
- ・ コーディネーターの山本さんは、総合型クラブが地方創生の一助になるには、活動の幅をスポーツ以外にも広げ、地域の課題解決に役立つ取り組みを率先して行い「プロフェッショナルな人材がUターン、Iターンできる受け皿になることが理想」と語りました。グループディスカッションでは、「地域の課題を探る」をテーマに、前半は課題を出し合い、後半は抽出した課題の解決方策について討論しました。結論までは求めずに、地域の課題解決を考える機会として、他地域の課題を認識でき、有意義でした。



[2日目]

【講演について】

テーマ：「自信を持とう！北海道！ヨーロッパクラブの視察を終えて」

講師：小田新紀氏（NPO法人幕別札幌内スポーツクラブ／SC北海道ネット副会長）

昨年12月の欧州一人旅での視察研修の結果と考察をスポーツクラブ活性化の視点で語り、示唆に富んだ提言から「北海道のクラブには大きな可能性がある」と期待感を膨らませました。19日間にわたるイギリス、オランダ、ドイツ歴訪で気づいた点について①スポーツは「食」や「音楽」と共にあった②クラブの成功の可否は人材である③スポーツが文化として根付いていたと説明しました。また、北海道には豊かな自然や豊富でおいしい食材があることから「食とスポーツの融合」をキーワードに「スポーツと共に食と音楽と自然を楽しむ『場』の創出を」と提案し、最後に「自信を持とう！北海道！」と、呼びかけました。



【発表タイムについて】

今年1月の全道研修で「クラブマネジャーに自信を付けてもらうための発表の場を作って欲しい」との意見があり、その具現化として発表タイムを設定した。10人のクラブマネジャーらが、クラブの理念や個性的な事業メニュー、成功例、失敗例を、1人10分の持ち時間で、率直に語りました。転職組3人が奮闘しているクラブ、観光行政とコラボしているクラブ、アウトドア事業でまちおこしに貢献しているクラブ、常設のトランポリン施設で幅広い活動をしているクラブ、介護予防を手掛けているクラブなど、参加者の興味、関心を呼ぶ内容が盛りだくさんでありました。



【まとめ】

総合型クラブが誕生して20年を経てなお多くのクラブが様々な悩みを抱え、自立を標榜しながらも模索を続けるクラブが散見される中、それぞれの地域の中でクラブの存在意義を見出す一つのきっかけとして、あえて「地方創生」をメインテーマに掲げました。地域とかけ離れたクラブにどれほどの存在意義があるのでしょうか。クラブは作ることが目的ではなく、その活動が地域のスポーツ推進、健康増進、コミュニティ機会の提供などに役立っていなければならないと考えます。SC北海道ネットはこれまで、各種研修のテーマを「現実論」で設定してきました。学んだ内容、体験した内容が、それぞれのクラブに持ち帰って役に立つことが重要と考えたからです。地域におけるクラブの存在意義を考えるきっかけになれば、目的を達成したものと思います。ともあれ、2日間で得た情報から何らかのヒントを得、それぞれのクラブの今後の運営にいささかでもプラスになれば幸いです。



北海道ブロッククラブネットワークアクション2015 実行委員長
伊端 隆康